



第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

添田, 仁
木村, 修二
板垣, 貴志

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 11(平成24年度事業報告書):40-42

(Issue Date)

2013-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005271>



管場所の実態を視察と聞いたものの、その後も市から具体的な提案はなく、市史編集室と協議を続けているが進展を見ていない。

なお、香寺町史研究室は、神戸大学と犬飼自治会との契約にもとづき開設当初から公民館別室を借用して活動しており、来年度以降も更新手続きが必要である。（文責・大槻守）

第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

歴史資料ネットワークへの協力・支援

(1) 災害対応関連

7月22日（日）～23（月）の両日、栃木県芳賀郡茂木町 S 家の被災歴史資料レスキューに参加した。S家は、元禄期から続く近江商人の家で、茂木で酒造株を買い取り、以来農産物の売買や質屋で財をなし、現在も酒造を営む旧家である。1986年8月5日の茂木水害（那珂川の増水）で被災し、今回、東日本大震災でも被害を受けた。敷地内に現存する2棟の土蔵には、自家の酒造・金融経営の帳簿に始まり、地元の歴史にかかわる古文書類、屏風・掛け軸などの美術品、そして膳碗類が多数収められていた。代々の当主が芸事にも造詣が深かったことから、栃木県の文化財指定を受けた美術品も含まれる。

参加人数は、2日間でのべ80名前後。メンバーは、一般の方はもちろん、茨城史料ネットと栃木史料ネット、栃木県立文書館、栃木県立図書館といった文化財関係者にとどまらず、神奈川資料ネット、千葉史料ネット、宮城資料ネット、歴史資料ネットワーク、NPO 歴史資料継承機構、文化庁と幅が広がった。また、近江商人であった S 家の史料を用いて執筆された、滋賀県内の自治体史関係者も参加していた。

土蔵、質蔵のそれぞれで、棚やまとまりごとに番号札を貼り付け、歴史資料の保管状況を「現状記録用紙」にスケッチし、写真撮影してから随時取り出していた。墨書があるものについては、すべて取り出した。番号がついた歴史資料は整理作業場に送られ、クリーニング、「概要記録用紙」への記入、ダンボール・エアキャップで梱包されたのちに、搬送待機史料置き場に集められ、一時保管場所にピス

トン輸送で運ばれた。これと並行して、建物の記録が作成され、文化的価値の調査が行われた。レスキューした歴史資料については、9月以降、茨城史料ネットに参加する若い大学院生が中心となり、茂木町教育委員会を支援して、定期的に整理を行っている。またこのレスキューをきっかけに「栃木文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク」（栃木史料ネット）が発足した。

つぎに11月1日～3日の3日間、長野県北部地震の被災地・長野県栄村で被災史料の保全活動を行う「地域史料保全有志の会」の活動に参加した。きっかけは、7月8日に行われた歴史資料ネットワーク総会シンポジウム「歴史遺産と資料を守りぬくー関西と知られざる大震災の現場を結ぶー」での白水智報告「これまでがあつて、これからがあるー栄村での文化財保全活動についてー」に触れたことである。

主に、被災した民具が収められている旧志久見小学校（廃校）で、古文書班と民具班に分かれて被災史料の整理を行った。私が参加した古文書班では、整理点数を増やしていくことよりもむしろ、基本的な文字の読解や内容の紹介・説明に重点がおかれ、初心者の方でも気軽に参加できる雰囲気があった。会場には、地元の文化財担当者だけではなく、レスキューに参加した一般の住民も入れかわり立ちかわり出入りする。彼らは地元の食材と一緒に、自宅に保管されていた民具を持ち寄り、参加者に披露する。すると、古文書や民具を整理している者も手を止め、初めて見る民具を囲んで、地元の生活や歴史の話題に花を咲かせる、といった具合である。それは単なる被災史料を整理する場ではなく、様々な時代や角度から栄村を楽しみ、地域の魅力について学び、考えることができる場であった。新しい被災史料の保全・活用の可能性を感じることができた。

（文責・添田仁）

(2) 神戸市兵庫区平野地区における活動

平野地区での活動の中心は、「奥平野古文書勉強会」への参加である。2010年2月に第1回目を行って以来、ほぼ1ヶ月に1回のペースで開催されてきており、本年度も同様のペースで開催されてきた。すべての例会で木村がチューターを行っている。参加者の実力は確実に上がってきており、テキストの進み具合も相当早くなっている。会員は、新入会者が1名あり13名となった。本会は次年度以降も継続することになっている。

（文責・木村修二）

石川準吉関係資料の整理

生野鉦山史研究の第一人者であった石川準吉旧宅（目黒・藤沢）にのこる新出史料群（石川通敬氏所蔵）の概要調査（資料の表紙を撮影し、目録を作成する作業）を行った。

昨年度、文書はすべて古文書箱（147箱）に詰め、三菱トランクルームに移管した。今年度は、その史料の表紙撮影を行い、目録の作成に備えた。作業の現場統括は、三村昌司（東京未来大学）が担当し、撮影は松谷昇蔵（早稲田大学院生）・石原豪（明治大学院生）が担当した。これらの写真データをもとに、神戸大学で目録作成作業を行った。

今年度は、2月末現在で、計3,075枚の写真を撮影し、このうち約1,000点の目録を作成した。

来年度は、引き続き表紙撮影・目録作成を進めるとともに、一部史料の翻刻・紹介を行う予定である。
（文責・添田仁）

長濱家文書の調査・展示

長濱家は、摂津国菟原郡脇浜村（現、神戸市中央区脇浜町）に居をかまえ、江戸末期には「播磨屋」という屋号で商売をし、明治期以降には村役人もつとめた家である。とくに長濱礼蔵氏は、神戸実業銀行の設立など地元経済の発展にも尽力し、神戸市議会議員までつとめている。同家所蔵の古文書の点数は1,926点におよぶ。作成年代は、江戸時代の中期から大正・昭和期までと幅広い。内容は、脇浜村や葺合区の行政にかかわる史料と、長濱家の家政にかかわる史料に大別される。

この長濱家文書は、阪神大震災で被災した。1995年4月13日、被災史料の巡回調査を行っていた歴史資料ネットワークのメンバーによって確認、緊急措置として神戸大学に搬送された古文書である（坂江渉「阪神・淡路大震災と地域文献資料のその後」

『第8回歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集 震災から15年—地域歴史資料の現在—』、2010年）。

1997年から、日本史教室の古文書合宿、さらには史料ネットが市民とともに行った「被災史料整理」で目録カードを作成した。それでも半分以上が未整理の状態だった。その後、2006年度から文学部海港都市研究センターが行った神戸・兵庫港関係史料調査で全点の目録が完成、2009年度には同地域連携セ

ンターが画像データを作って整理を完了、2010年5月10日に所蔵者へ返却した。

実は、長濱家文書は多くの災害をくぐり抜けてきた。阪神・淡路大震災は勿論のこと、1945年の神戸大空襲も奇跡的に回避していた。長濱家はもともと神戸市葺合区（現、神戸市中央区）にあったが、1940年に軍需工場の用地として接収されてしまい、現在の場所に引っ越してきた。直後の1945年3月の空襲により、葺合区を含む神戸市東部の海岸部は壊滅的な状態となったという。

このような特異な経歴を有する長濱家文書について、昨年度の3月22日-23日、「災害をのりこえた地域歴史遺産 葺合・脇浜の歴史と長濱家文書」と題して学内（文学部小ホール）での簡易展示を行った。これに引き続き、8月4日-11日に本展示をコミスタこうべ（神戸市生涯学習支援センター）4階展示室で開催した。「山の利用をめぐる」「葺合区の中核の脇浜村」「魚市場の面影」「災害と長濱家」といったトピックごとに、大学院生・学部生が協力してコンテンツをまとめ、江戸時代から大事に守り伝えられてきた古文書や古道具などを用いて展示した。

8月8日には神戸新聞で紹介されたこともあり、猛暑のなか120名が閲覧し、学生が展示の説明にあたった。アンケートには、「脇浜の発展に尽くした長濱禮蔵という方の存在を初めて知った。歴史は教科書だけに記載された人々だけでなく市井にうずもれた人々が他にもたくさんいることを思い知らされた」「古文書を通じてその地域の暮らしぶりが分かるのだなと感じた。昔の資料を大切にすることを学ぶことができた」「地道ながらも神戸大学の取り組みに敬意を表します。神戸市の面白い歴史の一面を垣間見ることができ、人間の営みに興味を覚えた」といった意見が寄せられた。展示の成果は、近日中に図録にまとめる予定である。（文責・添田仁）

徳島史料ネットの立ち上げ支援

今年度は、歴史資料保全ネットワーク・徳島（略称：徳島史料ネット）が予防ネットとして発足した。2012年9月16日の開催された設立集会「地域の歴史資料を守り、伝え、活かす。」（徳島市）にて、奥村弘が「大震災と地域歴史遺産—災害に強い豊かな地域歴史文化をめざして—」と題する講演をし、板垣が「歴史資料ネットワーク

の活動サイクルー被災地の過去・現在・未来を守る」と題する活動報告をおこなった。その後、添田仁が水損史料ワークショップを上演し、好評であった。

今後とも、生活復興と密接な関連をもつ資料保全の意義についての提起などを史料ネットとも協力しながらおこなっていききたい。

(文責・板垣貴志)

第4章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

本年度はいくつかの団体に協力して、次のような震災資料に関する報告や意見交換会などを催した。

① 2012年6月28日

地域連携センターおよび附属図書館の若手職員を対象とした意見交換会「震災文庫を学ぶ若手交流会」を人文学研究科 A 棟学生ホールにて開催した。奥村弘「大震災後の被災歴史資料と災害資料の保存」、佐々木和子「阪神・淡路大震災と資料保存」の報告を行い、附属図書館の司書らと交流を図った。

② 2012年7月2日

地域連携センター、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会の主催による「第12回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」を人文学研究科 A 棟学生ホールにて開催した。これは S 科研グループが共催し、同科研「第14回地域歴史資料学研究会」を兼ねた。板垣貴志「書評：人と防災未来センター資料室『阪神・淡路大震災における住まいの再建』」、石原凌河「書評：伊丹市立博物館『伊丹からの発信(本文編)』」の報告を行った。

③ 2012年7月31日～8月2日

東日本大震災の震災資料をめぐるヒアリング調査として、奥村弘・佐々木和子が岩手県大槌町・宮古市田老の現地調査を行い、岩手大学附属図書館、岩手県立図書館の職員の方々と意見交流を行った。

④ 2012年8月22日

ICA の主催による ICA オーストラリア・ブリスベン大会にて、佐々木和子が「3月11日の東日本大震災後の協力と復興」と題して報告を行った。

⑤ 2012年11月3日

神戸大学統合研究拠点にて開催された神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室シンポジウム「神戸から東北へ～いま伝えたいこと、そして学ぶこと～」にて、奥村弘・佐々木和子が「震災資料と被災歴史資料、二つの資料保全を考える」と題して報告を行った。

⑥ 2012年11月22日～23日

東日本大震災の被災地である宮城県岩沼市の現地調査および宮城県図書館・仙台市立博物館のヒアリング調査を行い、東日本大震災資料の現状と課題について意見交換を行った。これは S 科研グループと地域連携センターが協力した。

⑦ 2013年2月19日

地域連携センター、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、S 科研グループの主催による「第13回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」を人と防災未来センターにて開催した。これは S 科研グループの「第15回地域歴史資料学研究会」を兼ねた。長岡市立中央図書館文書史料室の田中洋史氏が「東日本大震災の避難所アーカイブはなぜ可能だったのか～長岡市立中央図書館文書資料室の取り組み～」と題して報告を行った。

⑧ 2013年3月8日

東日本大震災支援の一環として、岩手大学附属図書館、岩手県立図書館、東北大学附属図書館、宮城県図書館、福島大学附属図書館、国立国会図書館、神戸大学附属図書館、阪神間の公共図書館の職員の方々と、「第2回被災地図書館との情報交換会」を開催し、意見交換を行った。

(文責・吉川圭太)

第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材育成(学生・大学院生教育)

地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成16年(2004)度から平成18年(2006)度まで、工学部建築学科などと協力しつつ、文部科学省の支援をうけ、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの